

# たじひのだより

No.23



## 三宅西遺跡

写真1 三宅西遺跡で見つかった古墳時代中期(5世紀)の流路と水制(写真奥が南で、阪神高速6号大和川線とセブンパーク天美が写る)



まつばらしみやけにし  
松原市三宅西6・7丁目の三宅西遺跡では、松原市三宅西土地区画整理事業に伴って、令和4年(2022)9月から令和5年(2023)9月まで発掘調査を行いました。今回の主な調査成果には、弥生時代後期(2世紀)の水田と、古墳時代中期(5世紀)の流路(川の跡)からみつかった杭列があります。

弥生時代後期の水田は、遺跡の北側でみつかりました(写真2)。水田の畦畔は、洪水によって運ばれてきた砂でおおわれて、良好な状態で残っていました。当時の水田は、もとの地形の傾斜を利用して水を回しており、地形に合わせて畦畔を配置していました。そのため、水田区画は、今と比べるとかなり小さいものでした。また、起伏がやや大きい場所には、五角形をした水田区画もありました(写真3)。なお、水田の西側からは水路もみつかりましたが、今回は調査面積がせまかったため、水田への導水方法は明らかにできませんでした。

一方、遺跡の西側からは、古墳時代中期の流路がみつかりました(表紙、写真1)。流路を埋める砂礫には、古墳時代中期の土器が含まれていました(写真4)。また、流路が蛇行する部分には、杭列が設置されていました(写真5)。これは、流路内の水の流れが不安定で、流路の位置が変化しやすい場所に設置され、水が運んできた砂や礫を周囲に堆積させることで、水の流れを安定させる機能をはたしました。このような施設は、水制と呼ばれます。なお、この流路については、過去の発掘調査で上流部が確認されており、そこでも水制がみつかっています。流路の周囲には、集落や水田が存在したと思われ、流路が移動して周囲の土地利用に影響が出ないように、水制を使って流路を制御しようとしたものと考えられます。

井上 智博((公財)大阪府文化財センター)



図1 発掘調査を行った地点の位置図(縮尺1:25,000)



写真2 砂でおおわれていた弥生時代後期の水田(右上が北)



写真3 地形に合わせた大きさや形で区画された水田(南東から)



写真4 流路を埋める砂礫の中からみつかった古墳時代の土器



写真5 木杭を打ち込んで水の流れを制御する水制(南から)



# 調査成果2 | 新堂遺跡

## 新たにみつかった弥生時代後期の竪穴建物跡と川跡の窪地に捨てられた弥生時代後期～終末期の土器

令和5年(2023)10月上旬、国道309号沿いの松原市新堂4丁目にイオンタウン松原がオープンしました。この場所は松原市新堂4丁目土地区画整理事業の事業地にあたり、平成30年(2018)から令和5年(2023)にかけて店舗建設予定地などで断続的に発掘調査を3回行いました。

発掘調査を行った場所は新堂遺跡の南西端にあたり、泉北台地と瓜破台地(河内台地)にはさまれた扇状地に立



図1 発掘調査を行った地点の位置図(縮尺1:25,000)

地しており、遺跡の西側には西除川が流れています。

今は分かりにくいですが、昔は大小さまざまな川が網状に流れ、流水による川の浸食と増水時にあふれ出た土砂による堆積の作用により起伏が多い地形でした。

人々は川からあふれた土砂が積もり小高くなった土地に集落をつくったようで、調査地の北側では弥生時代後期(2世紀)の竪穴建物跡などがみつかっています(写真1)。また、300mほど南でも同じ時期の溝や土器を捨てた土坑といった集落の一部がみつかっています(写真2)。さらに、川跡の窪地からは弥生時代後期～終末期(2～3世紀)の土器が見つかりました(写真3・4)。

調査地の南側では弥生時代中期(紀元前2世紀～1世紀)の石器や土器も見つかっています。そのため、今回の調査では見つかりませんが、周辺により古い時代の集落があったと考えられます。



写真1 弥生時代後期の竪穴建物跡(手前の建物跡が幅約5.5m)



写真3 弥生時代後期～終末期の土器が捨てられた川跡の窪地



写真2 溝に捨てられた煮炊き用の土器



写真4 弥生時代後期～終末期の土器(左下の土器は捨てる前にわざと穴を開けている)





松原市教育委員会では、令和5年(2023)7月～8月に、現状を把握し今後の適切な保存をはかる目的で、松原市丹南3丁目にある来迎寺(融通念佛宗)の墓地に所在する丹南藩初代藩主高木正次の五輪塔(墓)を調査しました。

五輪塔は総高約2.06mで、高さ約1.6mの墳丘上に建立されています。墳丘の上に墓石が建立された大名墓は少なく、全国的に貴重な事例です。五輪塔の正面は東で、丹南藩陣屋が所在した方向にあたります。

五輪塔は上から、空輪・風輪・火輪・水輪・地輪の順で構成され、その下に反花座があり、一番下の段に切石基壇が設けられています(図2)。

空輪～地輪の各部材には梵字が刻まれ、地輪には被葬者名・没年などの銘文があります。梵字は方角によって決まっていますが、空輪・風輪・火輪は本来の方角とは異なる梵字でした。方角がずれている理由は資料がなくわかりません。

被葬者の高木正次は徳川家康の家臣で、元和9年(1623)に加増を受け、それまでの所領とあわせて合計一万石を支配することとなり、河内国丹南郡丹南(今の松原市丹南)に陣屋を構えて丹南藩を立藩しました。正次はこの年から寛永7年(1630)に亡くなるまで大坂定番を務めています。

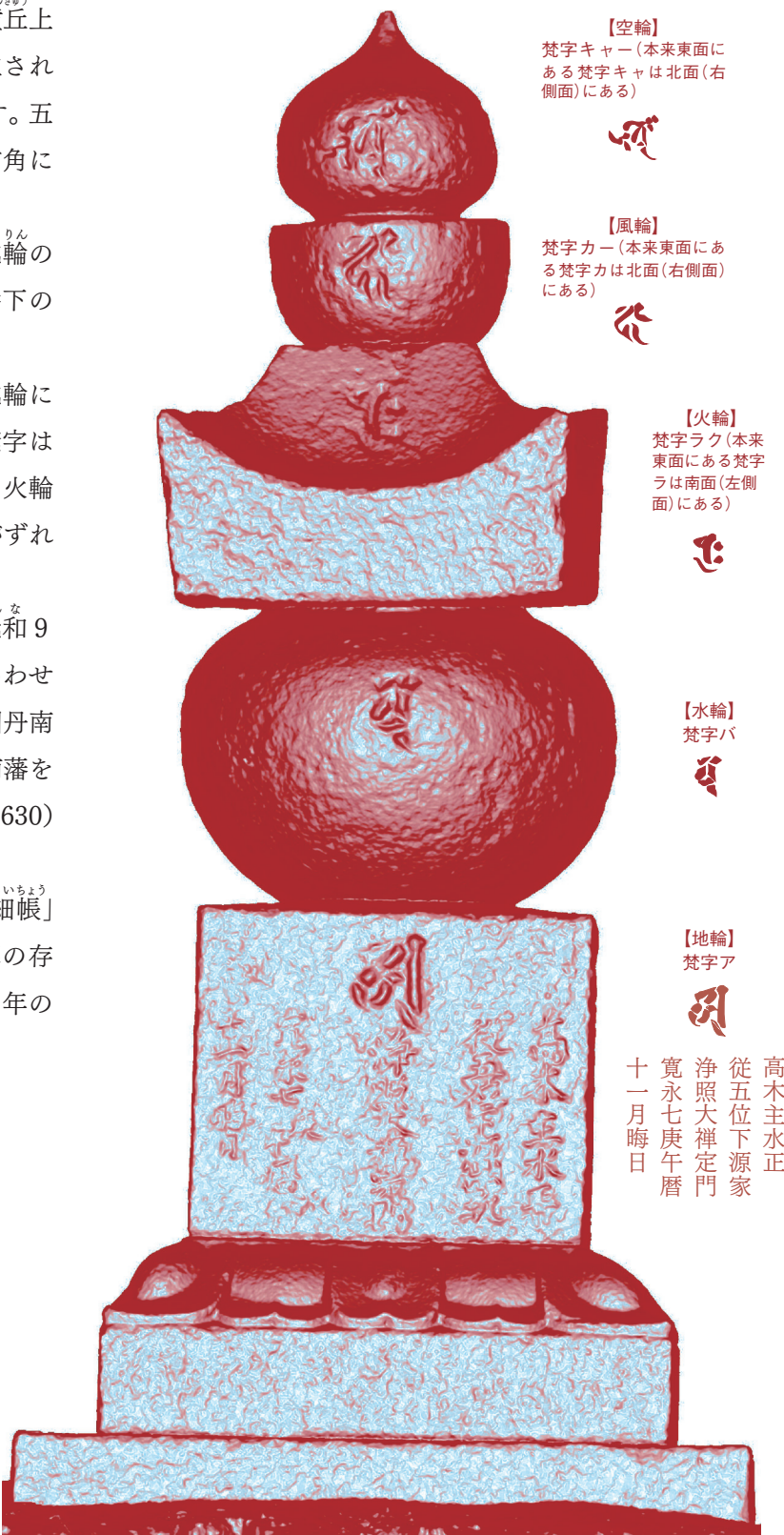
御殿様御墓所と記されている「丹南村明細帳」などの文献史料から元文5年(1740)には墓の存在がわかるため、五輪塔は寛永7年～元文5年の間に建立されたものと考えられます。



図1 調査地位置図(縮尺1:25,000)

今回の調査では、3次元レーザー測量と写真測量を行いました。測量データから五輪塔の3Dモデル・傾斜量図を作成し、それをもとに五輪塔の図面を作成しました。

下の図は傾斜量図で、傾斜のない平らな面を水色で、傾きの大きさを赤色の濃淡でそれぞれ表現しています。この図を観察すると、各部材の傾きや組み合わせの状況が把握できます。また、凹凸が観察しやすいため、銘文や梵字等の翻刻にも有用です。



【空輪】  
梵字キヤ(本来東面にある梵字キヤは北面(右側面)にある)



【風輪】  
梵字カ(本来東面にある梵字カは北面(右側面)にある)



【火輪】  
梵字ラク(本来東面にある梵字ラクは南面(左側面)にある)



【水輪】  
梵字バ



【地輪】  
梵字ア



高木主水正  
從五位下源家  
浄照大禪定門  
寛永七庚午曆  
十一月晦日

図2 丹南藩初代藩主高木正次五輪塔東面(正面)の傾斜量図(縮尺1:10)